



# 「紙を処分し、紙を使う小説家」

## 羽田圭介

小説家という職業柄、家に紙の資料は多い。僕は必ず、パソコンで書いている小説をプリンターで印刷する。ディスプレイに映る原稿を見ているだけでは気づけなかったミスや直すべき点に、印刷して初めて気づくからだ。それに赤ボールペンで修正を加え、データに反映させ、書き進めては印刷——その繰り返しだ。

作品が雑誌に掲載され、単行本になり著者見本が一〇冊送られてくるが、散々読み直し細かいところまで覚えてしまっている自著を読む気にはなれないし、どうしていいかわからない。無料でもらったものを人は大事にしないと知っているから、あまり人にあげる気にもなれないし。仕事をすればするほど、著者見本が一〇冊ずつ送られてきて、家の中がどんどん狭くなるのか……そう考えたまに憂鬱

鬱になっていた。もちろん、一七歳で小説家デビュー以来、三二歳の現在に至るまで、すべての著者見本を手元に置いていたわけではない。一作につき最低で三冊、平均的に六冊ほど、芥川賞受賞作である「スクラップ・アンド・ビルド」に関しては沢山配るかもしれないと、著者割引で購入し合計二〇冊近く持っていた。しかし通常、著者献本をする場合、出版社から直接送ってもらうから、手元にある本を人に配る機会ほとんどなかった。とりあえず、手元にあった自著のほとんどを、親のもとへ送った。それでも、賃貸マンションの物置にはまだまだ沢山の紙の資料が残っている。

数年前にドキュメントスキャナーを買って以降、もう読まないだろうという資料やまたすぐに手に入りそうな資料に関しては、スキャンしてPDF化し、原本は処分してきた。自分は、生活感のないモダンなインテリアが好きだ。そういうテイストの部屋に、資料が山積みの散らかった感じは似合わない。

右記のように散々、紙資料を電子化し処分してきた僕だが、それでもまだ一般的な人々の何十倍も紙資料を保有しているし、今も紙という媒体を使い続けている。スケジュール管理は、スマートフォン



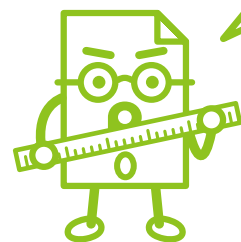
はだ・けいすけ●作家。東京都生まれ。明治大学商学部卒業。2003年「黒冷水」で第40回文藝賞を受賞しデビュー。15年「スクラップ・アンド・ビルド」で第153回芥川賞を受賞。他の著作に「不思議の国の男子」「ミート・ザ・ビート」「ワタクシハ」「隠し事」「メタモルフォシス」「コンテキスト・オブ・ザ・デッド」「成功者K」など。

のカレンダーアプリではなく紙の手帳で行うし、本も電子書籍ではなく紙の形式で買う。僕は思いついたこと等を本の余白に書き込むから、電子書籍ではダメだ。付箋を貼ったりもする。電子書籍リーダーの代替機能は現状、使い物にならない。どうせこの本に関する仕事が終われば電子書籍版を買い直すだろうなとわかっていても、まず紙の本を買う。だから、一冊の資料に関し、最近は一冊分の費用がかかる。僕が普通の人より紙という媒体にこだわるのは、実用的で便利だからだ。肉筆のメモを読めばそれを記した当時の思考が直感的に蘇るし、視界にいくつも並べての一覧性が高い。必要な部分だけ切り取って並べ替えて保存することもできるし、ファイル形式の違い等に悩まなくとも良い。紙と同じような使い方ができてかつ安い媒体が出てくればいいが、たとえばいくら有機ELディスプレイなんかが進化してもそうはならないはずだ。懐古趣味のない僕だが、死ぬまで紙媒体を活用し続けるだろう。

### ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

#### 厚さの秘密は、薄さです。

国語辞典や英和辞典などに使われるのは、「インディアペーパー」という紙。薄くて軽いのに、強い。文字の裏写りもない。今の厚さで、こんなにたくさん情報が載せられるのは、この紙のおかげなんです。もし、この紙がなかったら、今より何倍も分厚くなっていたのかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は11月30日号、福岡伸一さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo:Shiro Miyake